

モンゴル語 МОНГОЛ ХЭЛ, 英 Mongolian,

露 МОНГОЛЬСКИЙ ЯЗЫК, 中 蒙古(Měnggǔ)

【概 説】 モンゴル語族に属する言語の1つ。中央アジアのモンゴル高原を中心に分布する、モンゴル族によって話される。

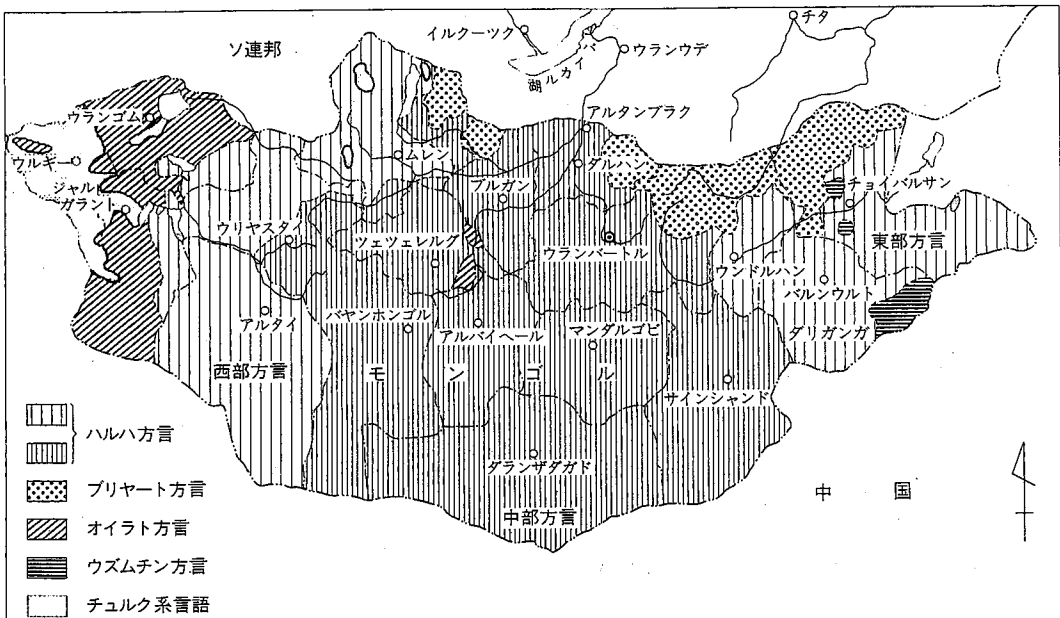
モンゴル族の主な居住地は、モンゴル人民共和国、および、中国の内モン自治区、甘肅省、青海省、新疆ウイグル自治区などである(く図)を参照。なお、「モンゴル諸語」の項の図1、および、「内蒙古語」の項の図も参照されたい。

話者数は、モンゴル人民共和国で約180万人、中国内で320~330万人、総計500万人余と推定される。

現在の標準語、および、書きことばの状況についてみると、モンゴル人民共和国では、1940年代から、ロシア字を採用して、ハルハ(Khalkha)方言に基づいた文章語を発達させ、これを国の公用語としている。一方、中国内の内モン自治区では、伝統的な縦書きのモンゴル文字で表記する「蒙古(モンゴル)文語」(「書写蒙古語」ともいう)を使用し、口語標準語の発音の基礎には、正藍旗のチャハル(Chakhar)方言がおかれている。さらに、中国新疆ウイグル自治区のオイラト(Oirat)系モンゴル族は、モンゴル文字を改良したトド(todo)文字で綴るオイラト文語を、17世紀後半から書きことばとして使用してきたが、将来的には、中国内の他のモンゴル族と同じモンゴル文語に移行する方針をうちだしている。

こうした状況に基づき、本辞典では、モンゴル人民

〈図〉 モンゴル語の方言分布(モンゴル人民共和国)



共和国のモンゴル語と中国の内蒙古自治区を中心に行なわれているモンゴル語を区別し、便宜的に、前者を「ハルハ・モンゴル語 (Khalkha-Mongolian)」, もしくは、単に「モンゴル語」とよび、後者を「内蒙古語」とよんで、それぞれの概要を記述する。したがって、本項で、以下に記述する「モンゴル語」は、「ハルハ・モンゴル語」と同義で、モンゴル人民共和国に行なわれているものをさす。中国内のモンゴル語については、「内蒙古語」の項を参照されたい。

[文字] モンゴル族は、13世紀の初めに、ウイグル文字を用いてモンゴル語を表記する、「モンゴル文語」を書きことばとして採用して以来、今世紀に至るまで、これを、700年以上にわたって、モンゴル族の共通の書きことばとして用いてきた。モンゴルでは、1921年の人民革命とそれに続く人民共和国の建国後、1920年代の後半からソ連邦で高まった民族語のラテン字化運動に呼応して、現代の口語に基づいた新しい書きことばを創作する問題が検討され、1930年代の初めには、漸進的にラテン字(ローマ字)正書法へ移行する方針が決定された。この決定を受けて、一時は、ラテン字正書法の学習運動が行なわれ、新聞記事の一部をラテン字正書法によって表記したり、若干の石版刷りの辞書や学習書が発行されたが、結局、ラテン字化は、正式に実施されるに至らなかった。その後、1942年には、ロシア字に基づいた新しいアルファベットと正書法を採用することが決定され、4年間の準備期間をへて、1946年から、この新しい書きことばに移行した。

モンゴル人民共和国で新しく採用された書きことばは、それに続く識字運動の中で、国民の間に急速に普及し、1980年代末には10パーセントに満たなかった識字率が、1969年には82.4パーセントに達し、現在では、ほぼ100パーセントに達している。

現代モンゴル語のアルファベットは、ロシア字のすべてに、*ө*, *ү* の2文字を加えた35文字である。

表1は、モンゴル語のアルファベットに、代表的な音価を付したものである。

アルファベットの内訳は、次のとおりである。

基本母音字(7) *a*, *и*, *о*, *ө*, *у*, *ү*, *э*

補助母音字(6) *e*, *ë*, *й*, *ы*, *ю*, *я*

子音字(20) *б*, *в*, *г*, *д*, *з*, *ж*, (*к*), *л*, *м*, *н*, *п*,

р, *с*, *т*, (*ф*), *х*, *ц*, *ч*, *ш*, (*ш*)

記号文字(2) *ь*, *ь*

カッコ内の文字は、もっぱら、ロシア語からの外来語を表記するのに用いられる。

補助母音字の *e*, *ë*, *ю*, *я* は、「子音+j+母音」の結合を表わすが、*e* は *je*, *jö* の2つの結合を、また、*ю* は *ju*, *jü* の2つの結合を表わす。この2字は、多

<表1> アルファベットとその音価

А а а	Л л л	Х х х
Б б б	М м м	Ц ц ts
В в в, (w)	Н н н, ъ	Ч ч ts̥
Г г г, г	О о о	Ш ш š
Д д д	Ө ө ө	Щ щ (štš)
Е е je, jö	П п р	Ъ ь 硬音符
Ё ё jo	Р р r	Ы ы i
Ж ж dž	С с s	Ь ь 軟音符
З з dz	Т т t	Э э e
И и i	У у u	Ю ю ju, jü
Й й i	Ү ү ü	Я я ja
К к (k)	Ф ф (f)	

注: カッコ内の音は、もっぱら外来語の発音に用いられる。

音字(polyphone)で、表記だけでは、いずれの音かを判定することはできない。

ямаа(jamā)「山羊」, ёс(jos)「決まり」, ес(jös)「9」, ерөөл(jöröl)「祝詞」, юм(jum)「物」, юүдэн(jüdəŋ)「防水帽」

子音字 *г* は、直後に母音字 *a*, *о*, *у*, *ы* を伴っているときは、口蓋垂音 *g* [g~ɣ] を表わし、それ以外では、軟口蓋音 *g* [g~ɣ] を表わす。

гар(gar)「手」, гэр(ger)「包」

бага(bag)「小さい」, бар(bag)「仮面」

しかし、次のような例外的な場合もある。

бага+аас—багаас(bagās)「仮面から」

cf. бага+аас—багаас(bagās)「幼少から」

上の2例は、同じ綴りであるが、発音は異なる。

子音字 *н* は、母音字の直前では、歯茎音の [n] で発音され、それ以外では、軟口蓋・口蓋垂音の [ŋ~N] で発音される。

нар(nar)「太陽」, мөнгө(möŋg)「銀」

энэ(en)「これ、この」, эн(en)「幅」

硬音符 *ь* は、特定の音価をもたず、一部の動詞活用語尾で、語幹との切れ目を表わす。

гаръя(gar+я)「出よう」

ольё(ол+ё)「手に入れよう」

その他の正書法上の主な特徴としては、次のような点があげられる。

1) 長母音は、*aa*, *oo*, *uu*, *ээ*, *өө*, *үү* のように、母音字を2つ連ねて表わす。ただし、*и(i)* の長音 (*i*) は、*ий* および *ы* で表わす(*ы* は、対格と属格の語尾にのみ用いられる)。

улаан(ulāŋ)「赤い」, тоос(tōs)「ほこり」, уул(ūl)「山」, тэмээ(temē)「ラクダ」, үүд(ūd)「門」, ерөөл(jöröl)「祝詞」, ийм(im)「このよ

うな, амыг(ам-йг)「口を」

2) 二重母音は, ай, ой, уй, үй など, 母音字と й を連ねて表わす。なお, эй の綴りは, 長母音の ē (<*ei) を表わす。

найм(naim)「8」, ойр(oir)「近い」, дугуй(dugui)「輪」, үйл(üil)「行為」, эвтэй(ebtē)「仲のよい」

3) 軟音符 ь, および, 第2音節以降の и(ий, на, но, ну を含む) は, 先行する第1音節の母音 а, о, у が, 口蓋化音 á[æ~ε], ó[œ], ú[ø] であることを表わす。この際, 軟音符や и に先行する子音も, しばしば口蓋化の特徴を帯びる。

амь(ám[эм ~ ем])「生命」

морь(mòr[mœr ~ мœr])「馬」

хувь(xúb[xœβ ~ xœβ])「部分」

тамхи(támэх[tэмix ~ тэмix])「タバコ」

и, но, ну の連結は, これら口蓋化音に後続する長母音 ā, ō, ū を表わす。

тахиа(táxā[texa: ~ тexa:])「鶏」

дохио(dóхō[dœxə: ~ dœxə:])「合図」

第1音節に書かれる長母音 aa, oo, uu が, 口蓋化している場合, 二重母音 ai, oi, ui と同じ発音になる。

ааль(aíl[aēl ~ aēl])「性格」

ооль(oíl[oēl ~ oēl])「手斧」

суурь(suir[suīr ~ suīr])「土台」

4) 第2音節以降の短母音, いわゆる「弱化母音」は, 母音字 а, о, э, ө および и で表記し, それらのいずれを用いるかは, 第1音節の母音によって, 表2のように決められている。

〈表2〉 正書法における弱化母音の表記

第1音節の母音字	第2音節以降の短母音(弱化母音)の表記
а аа ай я яа яй	а
у уу уй ю юу	
о оо ой ө өо	о
и ий	
э ээ е еэ	э
ү үү үй ю юү	
ө өө е	ө

注: 子音字 ж, ч, ш の後には, 第1音節の母音に関係なく, и が書かれる。

〔言語特徴〕 モンゴル語(ハルハ・モンゴル語)が, 内蒙古語と言語的にきわめて近い関係にあることは, すでに述べたとおりである。ハルハ・モンゴル語は, 内蒙古語の中では, チャハル方言とオルドス(Ordos)方言に近く, これらの間では, 相互理解も容易であるが, 東部のホルチン(Khorchin)方言やハラチン

(Kharachin)方言との間には, 少なからぬ差異が認められ, 相互理解にも多少の困難が伴う。

ルブサンワンダン(Ш. Лувсанвандан, 1959)は, 言語の特徴を基礎にしたモンゴル系諸言語, 諸方言の分類で, ハルハ, チャハル, オルドスの3方言と, ホルチン, ハラチン両方言とを, 次のように, 別々の方言群としてまとめている。

北部方言 ブリヤート諸方言

中部方言 ハルハ, チャハル, オルドス諸方言

東部方言 ホルチン, ハラチン諸方言

西部方言 オイラト諸方言

モンゴル語の主要な言語的特徴としては, 次のような点を指摘することができる。

1) 蒙古文語の ǰ に対応して, 破擦音の dʒ(*i の前で), および, dz (それ以外の位置で) が現われる。

	*i の前で	他の位置で
モンゴル語	dʒ	dz
カルムイク語	dʒ	z
ブリヤート語	ǰ	z
内蒙古語	dʒ	

蒙古文語	モンゴル語
ǰida	dʒad 「槍」
ǰaγu(n)	dzū 「100」
ǰöb	dzöb 「正しい」

同様に, 蒙古文語の ǰ に対応して, tš(*i の前で), および, ts (それ以外の位置で) が現われる。

	*i の前で	他の位置で
モンゴル語	tš	ts
カルムイク語	tš	ts
ブリヤート語	š	s
内蒙古語	tš	

蒙古文語	モンゴル語
činar	tšanər 「性質」
času(n)	tsas 「雪」
čöm	tsöm 「すべて」

2) 後続する音節の母音 *i の影響で, ウムラウト化した母音音素 á[æ~ε], ú[ø], ó[œ] をもつ。

蒙古文語	モンゴル語
ami(n)	ám 「生命」
uni	ún 「包の梁」
qori(n)	xór 「20」

3) 第1音節の母音 *i が, 後続音節の他の母音に同化される, いわゆる「i の折れ」が発達している。

蒙古文語	モンゴル語	ブリヤート語
ilaya(n)	jalā 「蚊」	ilāhan 「ブヨ」
bira	bjar 「体力」	b'ira 「同左」

kilbar	xjalbər「容易な」	x'ilbar「同左」
miqa(n)	max「肉」	m'axan「同左」
nidiü(n)	nüd「目」	n'üden「同左」

4) 第2音節以降の非強勢の短母音は、音質、位置ともに、自律性を失っている。語末の短母音は、すべて消失し、弱化母音を音節主音とする語中開音節がすべて閉音節化したことにより、第2音節以降の短母音は、閉音節でのみ安定している。

蒙古文語	モンゴル語
batayana	batGən「蠅」
tusalaqu	tusləx「助ける」
orulya	orlɛg「収入」

5) 語末の *n と *ŋ が融合して、ŋ として現われる。

蒙古文語	モンゴル語
on	oŋ「年」
ang	aŋ「(狩猟の)獲物」

モンゴル語では、語末の位置にも [n] が現われるが、これは、元来、「n+短母音」で終わっていた語の語末の短母音が、弱化、消失したことによって生じたものである。

蒙古文語	モンゴル語
ene	en「これ、この」
söni	šön「夜」

6) 喉音に、軟口蓋音の g と、口蓋垂音の G の2つの音素がある。

蒙古文語	モンゴル語
baɣa	baG「小さい」
baɣ	baG「仮面」
gerel	gerəl「光」
aɣa	aɾɛG「手段」

7) 名詞の主格形には、語幹末の「不定の n」が現われない。「不定の n」は、一群の名詞において、格変化の際に、末尾に鼻子音をもつ語幹と、それをもたない語幹とが交替するもので、モンゴル諸語に広くみられる現象である。ブリヤート語やカルムイク語などでは、これらの語で、鼻子音をもった語幹が、主格形として用いられるが、モンゴル語では、末尾に鼻子音をもたない語幹が主格形となる。

モンゴル語	カルムイク語
mod「木が」	modən
am「口が」	amən
xel「舌、ことばが」	kelən

8) 蒙古文語にある、次のような動詞活用形を、書きことばで用いる。

1人称意志形 -cyрай/-cyrəй「～しよう」

2人称懇願形 -гтун/-гтүн「～しなさい」

3人称祈願形 -турай/-түрэй「～するがいい」

これらの語尾は、母音字 y, ʏ が、1字だけで語の第2音節以降に書かれるという点で、例外的な綴りとなっている。

[音 韻]

1) 母音 モンゴル語では、語の第1音節に、常に強勢(強さアクセント)がおかれる。これに関連して、強勢がおかれる第1音節の母音と、強勢をもたない第2音節以降の母音とは、質的に顕著な差異が認められる。

第1音節の母音は、常に明瞭に発音され、互いにはっきりと区別されるが、第2音節以降の母音は、多かれ少なかれ、調音が弱化した不明瞭な母音として現われる。これは、短母音に関して特に顕著であり、第2音節以降の短母音は、すべて中舌母音に近い弱化母音となる。このため、第2音節以降の非強勢の短母音は、「弱化母音」(もしくは「あいまい母音」とよばれる。

第1音節に現われる短母音は、i, e, a, o, u, ö, ü, ä, ó, ú の10個で、それらの調音的な位置関係は、表3のとおりである。

ä は、IPA (1979年版)の表記では [æ~ɛ]、円唇母音は、それぞれ、o [ɔ], ó [œ], ö [e], u [o], ú [ø], ü [u] である。

<表 3> 第1音節に現われる短母音

	(前 舌)		(中舌)		(後 舌)	
	非円唇	円唇	円唇	非円唇	円唇	
狭	i			ü		
半狭	e		ù			u
半広	ä		ó	ö		o
広						a

長母音は、i, ē, ā, ō, ū, ö, ü の7つで、二重母音は、ai [aē], oi [oē], ui [oi], öi [öi], üi [üi]; ua [óa] の6つである。これらの長母音、二重母音は、第1音節にも第2音節以降にも現われるが、例外的に、öi は、第2音節以降にしか現われない。三重母音には、uai [öaē] がある(例: Göäē「～さん」)。

第2音節以降には、i, e, a, o, u, ö, ü の短母音それぞれに対応する弱化母音 i, ě, ä, ó, ũ, ö, ü が現われる。

第2音節以降の短母音の音質は、第1音節の母音の音質に依存しているので、これらを、同一の音素の変種と見なし、以下では、弱化母音を ə で表わす。

弱化母音は、その音質において自律性をもたないだけでなく、語中にそれらが現われる位置も、子音の配列に完全に依存しており、閉音節でのみ安定している。要するに、弱化母音は、その存在自体が、他律的、依

存的な性質のものとなっている。

batlax [batlāx] 「確認する」

debəsgər [debəsgər] 「敷物」

xodžəmdəx [xodžəmdəx] 「遅れる」

ünər [unür] 「匂い」

xödəlmərtšəŋ [xödəlmərtšəŋ] 「勤労者」

2) 子音 p, t, (k); b, d, g, G; ts, tš; dz, dž; (f), s, š, x; (w), j; l, (ɮ); r; m, n, ŋ からなる。

š, tš, dž は、IPA では [ʃ, tʃ, dʒ] で、カッコ内の音は、もっぱら外来語の発音に用いられる。

調音点と調音様式によって、モンゴル語の子音を分類すると、表4のようになる。

〈表4〉 子音体系

	唇音	齒茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音
閉鎖音	張り p	t	(k)		
	緩み b	d		g	G
破擦音	張り ts	tš			
	緩み dz	dž			
摩擦音	(f)	s	š	x	
接近音	(w)		j		
側面音		l(ɮ)			
ふるえ音		r			
鼻音	m	n		ŋ	

張り子音 p, t, ts, tš は、無声有気音であり、他方、緩み子音 b, d, g, G, dz, dž は、有声無気音である。

注意すべき子音の異音には、次のようなものがある。

b は、語中、語末で摩擦音 β となり、g, G は、語中で、摩擦音 γ, ɣ として発音される。この傾向は、母音間の位置で、特に顕著である。

x は、前舌・中舌母音の前では、軟口蓋音もしくは硬口蓋音 [x~ç] として、後舌母音の前では、口蓋垂音 [χ] として発音される。

ŋ は、ポーズ(休止)の前では、口蓋垂音 [N] として発音される。

l は、有声側面摩擦音 [b] である。

特殊な音として、無声側面摩擦音 [ɮ] が、チベット語からの借用語の発音に用いられることがある。

3) 母音調和 母音は、次のように、「張り母音」「緩み母音」および「中性母音」の3つの系列に分かれ、張り母音と緩み母音は、1語中に共起することがない。

張り母音 a, ā, ai, á, ua, uai; u, ū, ui, ú; o, ō, oi, ó

緩み母音 e, ē, i; ü, ū, üi; ö, õ, öi

中性母音 ə, ī

さらに、円唇母音の o, ö の後に、平唇母音の ā, ē は現われないという「前進的円唇同化」の現象がある。

第2音節以降に現われる母音は、第1音節の母音の種類によって、表5のような生起の制限がある。

〈表5〉 母音調和の条件

	[第1音節の母音]				[第2音節の母音]			
	i) 類	ii) 類	iii) 類	iv) 類	i) 類	ii) 類	iii) 類	iv) 類
a	á	ā	ai		ā	ai		
u	ú	ū	ui				ū	
ua			uai					
o	ó	ō	oi	ō	oi			
i	ī							i, ə
e	ē			ē	ē(ɣ)			
ü	ū	üi				ū		
ö	õ			õ	öi			

注: ē < *ei.

母音調和は、接尾辞にまでおよび、造語的、文法的な接尾辞のうちには、次のような母音交替による異形態をもつものが多い。

i) ā ~ ō ~ ē ~ õ

ii) ai ~ oi ~ ē (<*ei) ~ öi

iii) ū ~ ū

以下、母音調和におけるこれらの母音交替を、それぞれ、i) -ā⁴, ii) -ai⁴, iii) -ū⁴ のように表わす。たとえば、名詞造格形の語尾 -ār⁴「〜で」は、-ār, -ōr, -ēr, -ōr の異形態をもち、それらのうちのいずれが用いられるかは、次のように、語幹の第1音節の母音によって決まる。

gar 「手」+ār—gar-ār 「手で」

us 「水」+ār—us-ār 「水で」

mór 「馬」+ōr—mór-ōr 「馬で」

iš 「柄」+ēr—iš-ēr 「柄で」

šüd 「歯」+ēr—šüd-ēr 「歯で」

xöl 「足」+ōr—xöl-ōr 「足で」

〔形態〕 造語的、文法的な語形変化は、語幹に、さまざまな接尾辞が付くことによって実現される。

語形変化に際しては、一部の人称代名詞や指示代名詞を除いて、語幹の変化は少ない。モンゴル語は、他のモンゴル系諸言語と同様、安定した語幹に、次々と接尾辞が付着して単語が形成される、典型的な膠着的言語である。

語幹と接尾辞が結合する際の、結合規則には、次のようなものがある。

1) 長母音、二重母音で終わる語幹に、長母音で始

まる接尾辞が接尾する際には、語幹と接尾辞との間に、つなぎの子音 *G, g* が挿入される。子音 *G* は *ā, ū, ǝ* の前に、*g* は *ī, ē, ū, ǝ* の前に挿入される。

bū 「銃」+*ār* (造格)—*bū-g-ār* 「銃で」

sū 「乳」+*ēr* (造格)—*sū-g-ēr* 「乳で」

以下、つなぎの子音は、-(*G*)*ār*⁴、-(*g*)*īg* のように、接尾辞の前に、カッコに入れて表わす。

bū 「銃」+(*g*)*īg* (属格)—*bū-g-īg* 「銃の」

2) 子音で終わる語幹に、母音(長母音, 弱化母音)で始まる接尾辞が接尾する際、語幹末子音の直前の短母音 *ə* は消失する。

xamer 「鼻」+*īg* (属格)—*xamer-īg* 「鼻の」

tereg 「車」+*ēr* (造格)—*tereg-ēr* 「車で」

busəd 「他人」+*əd* (与位格)—*busd-əd* 「他人に」

amər- 「休む」+*əb* (近過去)—*amr-əb* 「休んだ」

3) 一部の名詞は、格変化に際して、語幹末に鼻子音 *n ~ ŋ* をもつ形と、鼻子音をもたない形が交替する(いわゆる「不定の *n*」)。「不定の *n*」は、主格、対格、造格、共同格、および、不定格では現われず、属格、与位格、奪格の前で現われる。

例) *mod* ~ *modəŋ* 「木」の格変化

主格 *mod* 「木が」

属格 *modn-ī* 「木の」

対格 *mod-īg* 「木を」

(不定格 *mod* 「木を」)

与位格 *modəŋ-d* 「木に」

奪格 *modn-ōs* 「木から」

造格 *mod-ōr* 「木で」

共同格 *mod-toi* 「木と」

以下、「不定の *n*」は、*am(əŋ)* 「口」、*mod(əŋ)* 「木」、*xurū(ŋ)* 「指」、*temē(ŋ)* 「ラクダ」のように、語幹末に、カッコに入れて表わす。

4) 語幹末に鼻子音 *ŋ* をもつ語のうちの若干の名詞では、複数語尾 *-ūd²*、および、属格、奪格、造格の格語尾、また、再帰所属語尾 *-ā⁴* が接尾する際、語幹末に、子音 *g* が現われる。これを、*aŋ(g)* 「獣」、*buləŋ(g)* 「隅」、*xöbəŋ(g)* 「綿」のように、語幹末に、カッコに入れて表わす。

aŋ(g) 「獣」+*ūd²* (複数)—*aŋg-ūd* 「獣(複数)」

aŋ(g) 「獣」+*ās⁴* (奪格)—*aŋg-ās* 「獣から」

5) 一般に、名詞語幹末の鼻子音 *ŋ* は、母音で始まる接尾辞の前で、*n* と交替する。

xāŋ 「皇帝」+*ī* (属格)—*xān-ī* 「皇帝の」

xüŋ 「人」+*ās⁴* (奪格)—*xün-ēs* 「人から」

また、語幹末の子音 *ŋ* は、造語的な接尾辞が接尾する際に、しばしば脱落する。

daisəŋ 「敵」+*l-*—*daisəl-* 「敵対する」

bajəŋ 「富裕な」+*dž-*—*bajdž-* 「富む」

文法的な語形変化は、名詞類の曲用と動詞類の活用で大別される。

A) 名詞 名詞類の曲用には、1) 数、2) 格、3) 所属、の3種類がある。

これらは、それぞれ、独自の接尾辞によって表わされるが、それらが同時に1つの語幹に付くときには、

語幹+複数語尾+格語尾+所属語尾
の順で接尾する。

ax + nər + tai + tšən

兄 複数 共同格 2人称所属

→ *ax-nər-tai-tšən* 「君の兄さんたちと」

1) 数の範疇としては、複数語尾がある。複数語尾の付いた形は、2個以上の事物に言及する場合に必ず要求されるものではなく、多様性やばらつきを強調する場合に用いられる。数詞や数量詞によって修飾されている名詞は、通例、複数語尾をとらない。

複数語尾には、i) *-nūd²*, ii) *-ūd²*, iii) *-nər*, iv) *-(ə)d*, v) *-(ə)s* がある。これらのうち、もっとも生産的な語尾は、*-nūd²* と *-ūd²* である。

i) *-nūd²* は、長母音、二重母音、「不定の *n*」で終わる語幹に付く。「不定の *n*」をもつ名詞は、末尾に *n* をもたない語幹に、*-nūd²* が付く。

dalai 「海」+*nūd*—*dalai-nūd*

širē(ŋ) 「卓」+*nūd*—*širē-nūd*

mod(əŋ) 「木」+*nūd*—*mod-nūd*

ii) *-ūd²* は、子音で終わる語幹に付く。

xot 「町」+*ūd*—*xot-ūd*

ger 「家」+*ūd*—*ger-ūd*

xüxəd 「子供」+*ūd*—*xüxd-ūd*

aŋ(g) 「獣」+*ūd*—*aŋg-ūd*

iii) *-nər* は、人を表わす若干の語に付く。

ax 「兄」+*nər*—*ax-nər*

dū 「弟妹」+*nər*—*dū-nər*

emtš 「医者」+*nər*—*emtš-nər*

接尾辞 iv) *-(ə)d* と v) *-(ə)s* は、限られた一部の名詞に付く。

tüšməl 「役人」+*d-*—*tüšmə-d*

erdəmtəŋ 「学者」+*d-*—*erdəmtə-d*

maltšəŋ 「牧民」+*d-*—*maltšə-d*

surəgtš 「生徒」+*d-*—*surəgtš-əd*

adžəltšəŋ 「労働者」+*d-*—*adžəltšə-d*

em 「女」+*s-*—*em-əs*

jadū 「貧乏人」+*s-*—*jadū-s*

形容詞から集合名詞をつくる派生語尾の *-tšūd²* (～*-tšül²*) も、一種の複数語尾と見なすことができる。

dzalū 「若い」+*tšūd*—*dzalū-tšūd* 「青年たち」

bajəŋ 「富裕な」+*tšūd*—*bajə-tšūd* 「金持ちたち」

moŋgəl 「モンゴルの」+*tšūd*—*moŋgəl-tšūd* 「モ

ンゴル人たち」

なお, xüŋ「人」の複数形は, xümūs「人々」となる。

2) 格の種類と語尾, その代表的な意味は, 表6のとおりである。

名称	語尾	代表的な意味
主格	-φ(ゼロ)	「～が, ～は」
属格	-(g)īŋ, -i, -ŋ	「～の」
対格	-īg, -g	「～を」
(不定格)	-φ(ゼロ)	「～を)」
与位格	-(ə)d, -t	「～に, ～へ」
奪格	-(g)ās ⁴	「～から」
造格	-(g)ār ⁴	「～で」
共同格	-tai ⁴	「～と」

「不定の n」をもつ語幹では, 属格, 与位格, 奪格で, 語幹末に n が現われ, 主格, 対格, 不定格, 造格, 共同格では, n をもたない語幹が用いられる。

不定格は, 対格と同様, 動詞の目的語となる格であるが, 格語尾はなく, 主格形と同形である。目的語となる名詞は, 特定化されている場合(名詞・代名詞の属格形や指示形容詞などで限定されている場合など)には, 対格形におかれ, 特定化されていない場合には, 不定格におかれる。

属格形語尾は, 一番種類が多い。そのうち, -ŋ は, 二重母音および長母音 i で終わる語幹に, -i は, 子音 ŋ で終わる語幹に, -(g)īŋ は, 上記以外の語幹(i 以外の長母音, ŋ 以外の子音に終わる語幹)に, それぞれ接尾する。長母音で終わる語幹では, つなぎの子音 g が現われる。

対格形語尾のうち, -g は, 二重母音, 長母音, ŋ(g) で終わる語幹に, -īg は, それ以外の語幹に付く。

与位格の語尾のうち, -t は, 子音 g, s, r, b に終わる若干の語幹に, -(ə)d は, それ以外の語幹に付く。カッコ内の弱化母音は, 語幹が d, t, dž, dz, s, š, tš, ts, x で終わる語に付く場合に現われる(表7, 表8を参照)。

語幹	dū「弟妹」	noxoi「犬」 cf. širē(ŋ)「卓」	
主格	dū	noxoi	širē
属格	dū-gīŋ	noxoi-ŋ	širēn-i
対格	dū-g	noxoi-g	širē-g
与位格	dū-d	noxoi-d	širēŋ-d
奪格	dū-gēs	noxoi-gōs	širēn-ēs
造格	dū-gēr	noxoi-gōr	širē-gēr
共同格	dū-tē ^注	noxoi-toi	širē-tē ^注

注: 正書法では, дүүтэй, ширээтэй と書かれる。

〈表8〉 子音に終わる語の格変化

語幹	ger「家」	xüŋ「人」	aŋ(g)「獣」
主格	ger	xüŋ	aŋ
属格	ger-īŋ	xüŋ-i	aŋg-īŋ
対格	ger-īg	xüŋ-ig	aŋ-g
与位格	ger-t	xüŋ-d	aŋ-d
奪格	ger-ēs	xüŋ-ēs	aŋg-ās
造格	ger-ēr	xüŋ-ēr	aŋg-ār
共同格	ger-tē ^注	xüŋ-tē ^注	aŋ-tai

注: 正書法では, гэртэй, хүнтэй と書かれる。

3) 所属には, a) 再帰所属と, b) 人称所属の2種類がある。

a) 再帰所属語尾(-(g)ā⁴, -xā⁴)は, 斜格(主格以外の格)形の名詞に付いて, それが, 文の主語に所属することを表わし, 多くの場合, 「自分の～」と訳しうる。

bī ax-tai-gā jab-ən.

私は 兄と(←自分の) 行きます

tši ax-tai-gā jab.

君は 兄と(←自分の) 行け

bat ax-tai-gā jab-əb.

バトは 兄と(←自分の) 行った

-xā⁴ は, 属格形に付き, -(g)ā⁴ は, それ以外の斜格形に付く。対格形の再帰所属では, 対格語尾が現われる場合と現われない場合の両形がある。

例) ax「兄」の再帰所属形

属格 ax-īŋ-xā「自分の兄の」

対格 ax-ā ~ ax-ig-ā「自分の兄を」

与位格 ax-d-ā「自分の兄に」

奪格 ax-ās-ā「自分の兄から」

造格 ax-ār-ā「自分の兄で」

共同格 ax-tai-gā「自分の兄と」

b) 人称所属語尾は, 「私の」「君の」「彼の」など, 人称代名詞の属格形と同様の所有, 所属の意味を, 語尾によって表わす。語尾には, 表9にあげた種類がある。

〈表9〉 人称所属語尾

	単数	複数
1人称	-mən	-mān
2人称	-tšən	-tən
3人称	-(ə)n	

人称所属語尾は, 名詞類の格変化形(主格を含む)に接尾する。

なお, 人称所属語尾が対格形に接尾する際には, 語尾 -īg の末尾の子音 g は, 脱落して -i となり, 語尾 -g には, 長母音 i が付加されて, -gī となる。

ax-ig「兄を」+tšən—axī-tšən「君の兄さんを」

noxoi-g「犬を」+mən—noxoiġi-mən「私の犬を」

B) 代名詞 代名詞も、名詞と同様、複数、格、所属の語尾をとって、曲用変化する。これらの曲用語尾は、名詞に付くものと同じであるが、代名詞の変化では、格変化に際して、語幹の交替があることと、不定格形がないことが、一般の名詞と異なる。

人称代名詞では、1人称と2人称の単数で、次のような語幹の交替がある。2人称単数には、親称と尊称の2つの系列がある。

	〔1人称単数〕		〔2人称単数〕	
		親 称	尊 称	
主格形	bī「私は」	tši「君は」	tā「あなたは」	
属格形	min-i	tšin-i	tan-i	
対格形	namai-g	tšamai-g	tan-ig	
その他	nad-	tšam-	tan-	

上の「その他」は、与位格、奪格、造格、共同格の語幹である。なお、1人称単数と与位格形には、nad-edとnadの両形が用いられる。

1・2人称複数代名詞の語幹交替は、次のとおりである。

	1人称複数	2人称複数
主格形	bid ~ bjad 「私たちは」	tānēr「君たちは」
斜格形語幹	bidən-	tānēr-

1・2人称複数代名詞の属格形には、bidn-i「私たちの」、tānr-iġ「君たちの」と並んで、manai「私どもの」、うちの」、tanai「おたくの(家、国、など)」という形も用いられる。2人称代名詞の複数形には、親称と尊称の区別はない。

3人称の人称代名詞には、次に述べる遠称の指示代名詞が代用される。

指示代名詞には、話し手に近いものをさす近称と、話し手から遠いものをさす遠称の2つの系列がある。

	主格形	斜格形語幹
近 称 単数	en	ün-注)
複数	ed	edən-
遠 称 単数	ter	tün-注)
複数	ted	tedən-

(注：造格形だけは例外で、ügēr, tūgērとなる) 疑問代名詞をはじめとする主な疑問詞には、次のようなものがある。

xej「誰」、jū(ŋ)「何」、ál(əŋ)「どれ」、xed(əŋ) ~ xedi「いくつ」、xer「どれほど」、jamər「どんな」、xedzē「いつ」、xā ~ xān「どこ」、jā-「どうする」、など。

C) 数 詞 基本数詞は、次のとおりである。
「1」neg(əŋ), 「2」xojer, 「3」gureb ~ gurbəŋ, 「4」döreḅ ~ dörbəŋ, 「5」tab(əŋ),

「6」dzurgā(ŋ), 「7」dolō(ŋ), 「8」naim(əŋ), 「9」jös(əŋ), 「10」arəḅ ~ arbəŋ, 「20」xór(əŋ), 「30」Gutš(əŋ), 「40」dōts(əŋ), 「50」tab(əŋ), 「60」džar(əŋ), 「70」dal(əŋ), 「80」naj(əŋ), 「90」jer(əŋ), 「100」dzū(ŋ), 「1,000」mjaŋG(əŋ), 「10,000」tüm(əŋ)

語幹末に ŋ をもった形は、合成数詞をつくるときに、名詞を修飾するときに用いられる。その例外は、neg「1」、xojer「2」、および、mjaŋG「1,000」で、これらは、語幹末に ŋ をもたずに合成数詞をつくり、さらに、neg と xojer は、この形で名詞の修飾語となる。

tabəŋ mjaŋG jösəŋ dzūŋ najəŋ dolōŋ xón
「五 千 九 百 八 十 七(頭)の羊」

一方、語幹末に ŋ をもたない形は、数を数えあげるときや、後置詞の dáxəŋ「〜倍」、xürtəl「〜まで」、garui「〜以上」、šaxū「〜近く」などととも用いられる。

arəḅ dáxəŋ「10倍」、xór xürtəl「20まで」、
gutš garui xüŋ「30人以上」、dzū šaxū xón
「100頭近くの羊」

数詞も、格語尾、所属語尾をとって、名詞と同様の曲用変化する。格変化に際して、主格、対格、不定格、造格、共同格で、語幹末の ŋ が脱落するもの、「不定の n」をもつ名詞の場合と同様である。

数詞に付く、主な造語的な接尾辞としては、次のものがある。4を除き、いずれも、末尾に ŋ をもたない語幹に付く。

1) -duġār²「第〜番目の」(順序数詞をつくる；この接尾辞は、合成語と同様の扱いを受け、第2音節以降でも母音 u ~ ü が現われる)

xojer「2」—xojerduġār「第2の、2番目の」
jös「9」—jösduġēr「第9の、9番目の」

2) -(g)ül²「〜して」(集合数をつくる)

tab「5」—tabül「5人して」
xór「20」—xörül「20人して」

ただし、xojer「2」は xojuł「2人して」、dzurgā「6」は dzurgül「6人して」、dolō「7」は doluł「7人して」と、不規則な形となる。

3) -(g)ād⁴「約〜の」(概数詞をつくる)

arəḅ「10」—arbād「約10の」
dzū「100」—dzūgād「約100の」

4) -t~tā⁴「〜回」(回数詞をつくる)

Gurbəŋ「3」—Gurbəŋtā「3回」
mjaŋGəŋ「1,000」—mjaŋGəŋtā「1,000回」

分配数(「〜ずつ」)は、同じ数詞を重ねて表わす。
gureḅ Gurbəŋ debter「3冊ずつのノート」
tab tab-ār jabəḅ.「5人ずつで出かけた」

なお、分配数詞として、neg「1」は nedžed「1つずつの」、xojər「2」は xošöd「2つずつの」という特別な形も用いられる。

D) 動詞 動詞の活用は、その意味と機能により、1) 命令・願望類、2) 叙述類、3) 形動詞類、4) 副動詞類の4種類に分けられる。

命令・願望類と叙述類は、法(mood)の範疇に属するもので、あることがらを述べる話し手の心的態度に関連する。動作、状態が実現することを、話者の意向として述べるのが命令・願望類であり、動作、状態を、事実もしくは話者の体験、伝聞として述べるのが叙述類である。これらは、いずれも、文の末尾に位置して、言い切りの形で、文を終止するはたらきがある。

これに対して、形動詞類と副動詞類は、文中の他の語句に接続する動詞の形で、名詞および形容詞としての意味とはたらきを合わせもつのが形動詞類で、副詞としての意味とはたらきをもつのが副動詞類である。

1) 命令・願望類は、種類が多い。これには、1人称の主語に呼応する意志；2人称の主語に呼応する命令、勧告、催促、懇願；3人称の主語に呼応する命令、祈願；3つの人称のいずれの主語にも呼応する願望、懸念などの形が含まれる。命令・願望類の語尾とその主要な意味は、表10のとおりである。

〈表10〉 命令・願望類の語尾

種類	語尾	例
1人称の主語に呼応する：		
意志1	-(ə)j	ir-əj「来よう」
意志2	-sugai ²	ir-sügē「来よう」
2人称の主語に呼応する：		
命令1	-φ(ゼロ)	ir「来い」
勧告	-(G)ārai ⁴	ir-ērē「(後で)来なさい」
催促	-(G)ātš ⁴	ir-ētš「(早く)来なさい」
懇願	-(ə)gtuŋ ²	ir-əgtün「おいで下さい」
3人称の主語に呼応する：		
命令2	-(ə)g	ir-əg「来るがいい」
祈願	-tugai ²	ir-tügē「来るように」
1～3人称の主語に呼応する：		
願望	-(G)āsai ⁴	ir-ēsē「来たらなあ」
懸念	-(G)ūdžai ²	ir-ūdžē「来ないように」

注：カッコ内の母音əは、子音で終わる語幹に付く際に現われる。以下、特に断りのない限り同様。

これらのうち、意志形2 -sugai²「～しよう」、懇願形 -(ə)gtuŋ²「～して下さい」、祈願形 -tugai²「～するように」の3形は、文語的な表現で、公的機関の決定、標語、アピール、スローガンなどに多く用いられる。これら3形は、第2音節以降に母音 u～ü をも

つという点で、母音調和の例外をなす。

命令・願望類の打ち消し(禁止)は、動詞活用形の前に、否定詞 bitgī [bitxi:] もしくは bū をおいて表わす。

bitgī ir.「来るな」、bitgī ir-ētš.「来ないで!」、
bitgī ir-ērē.「来ないで下さい」；
bū ir.「来るな」、bū xerəld-əj.「口論はよそう」、
bū xel-əg.「言うがままにしておきな」

2) 叙述類は、時制を表わし、言い切りの形で、文の述語となる。時制には、表11の4種類がある。

〈表11〉 叙述類の語尾

種類	語尾	例
現在・未来	-(ə)n	ir-ən「来る、来ます」
単純過去	-(ə)b, -səŋ	ir-əb, ir-səŋ「来た」
体験過去	-lā ⁴	ir-lē「(確かに)来た」
伝聞過去	-džē, -tšē	ir-džē「来た(そうだ)」

単純過去形の -(ə)b は、平叙文の言い切りの形としては、もっぱら書きことばで用いられ、話しことばでは、その代わりに、形動詞完了形と同形の -səŋ が用いられる。

体験過去形の -lā⁴ は、近い未来を表わすことがある。

bī jab-lā.「私は今も行きます」

伝聞過去形の -džē, -tšē は、母音調和に従わない。これらのうち、-tšē は、ab-「取る」、ög-「与える」、xür-「達する」、gar-「出る」、sur-「学ぶ」、ös-「育つ」など、b, g, r, s で終わる少数の語幹に付き、-džē は、それ以外の語幹に付く。

疑問形は、Yes-No 疑問文では、文末助詞の ū² を付け、疑問詞を含む疑問文では、(ə)b を付ける。

否定形は、対応する形動詞形に、-güi「～ない」を付けて表わす。

現在・未来時制と単純過去時制における、肯定、疑問、否定の対応は、次のようになる。

〈現在・未来時制〉

肯定形 ir-ən.「来ます」
疑問形 ir-x-ū?「来ますか?」
cf. ir-n-ū?「来て下さいますか(依頼)」

否定形 ir-əx-güi.「来ません」

〈単純過去時制〉

肯定形 ir-əb. (文語)「来た」
ir-səŋ. (口語)「来(まし)た」
疑問形 ir-b-ū? ~ ir-sn-ū?「来(まし)たか?」

否定形 ir-ē-güi.「来なかった」

cf. ir-səŋ-güi.「来られなかった(未完遂)」

経験過去 -lā⁴、伝聞過去 -džē, -tšē の疑問形としては、それぞれ、-lū²、-džū²、-tšū² という形が用いら

れる。

ir-lü? 「来た(んだ)っけ? (経験の確認)」

ir-džü? 「来た(来る)んだって? (伝聞の確認)」

3) 形動詞類は, a) 「～すること; ～したこと」などの名詞的な意味をもち, あるいは, b) 「～する～; ～した～」と, 他の名詞類を修飾する形容詞的な意味をもつ動詞活用形の総称である。同時に, 動詞として他の語句を支配するはたらきも有し, 名詞句, 形容詞句や, 名詞節, 形容詞節の核となる(表12)。

〈表 12〉 形動詞類の語尾
種類 語尾 例

完了	-səŋ	ir-səŋ 「来(てしまっ)た～」
継続	-(G)ā'	ir-ē 「(今)来ている～」
予定	-(ə)x	ir-əx 「来る～」
習慣	-dəg	ir-dəg 「(いつも)来る～」
可能性	-mār'	ir-mēr 「来うる～, 来たい～」

形動詞類は, 名詞の意味では, 名詞類と同様に, 格語尾, 所属語尾(人称, 再帰)をとって, 曲用変化をする。

形動詞類は, 文末助詞の jum を伴って, 文を終止するはたらきがある。また, 完了形(-səŋ), 継続形(-(G)ā'), 習慣形(-dəg)は, そのままの形で文を終止することがあり, この点では, 叙述類との差異はない。

このほか, -(ə)gtš 「～する(人)」, -(ə)gsəd 「～した人たち」という形も, 形動詞的なはたらきをもった語尾である。

ir-əgtš 「来る(人)」, ir-əgsəd 「来た人たち」

形動詞類の否定は, 接尾辞 -güi 「～ない」を付けて表わす。その際, 習慣形(-dəg)の否定は, -(ə)dgüi となる。

unš-dəg 「(いつも)読む～」—unš-ədgüi xüŋ 「読まない(読書しない)人」

形動詞類が述語となると, それに, 動詞 bai- 「～がある(いる)」, bol- 「～になる」の活用形が結合して, さまざまな時制が表わされる。

ir-dəg bai-b. 「通って来ていた(過去の習慣)」

ir-dəg bai-n. 「通って来ている(現在の習慣)」

ir-dəg bol-ən. 「通って来ることになる(未来の習慣)」

ir-əx bai-b. 「来るはずだった(過去の予定)」

ir-mēr bai-n. 「来うる, 来たい(現在の可能性, 願望)」

また, 形動詞予定形は, xerəgtē 「～せねばならない」, jostoi 「～すべきだ; ～するはずだ」, durtai 「～するのが好きだ」, sanātai 「～するつもりだ」, xüsəltē 「～したい」などの語と結びついて, 述語となる。

oroi xöl xī-x xerəgtē.

夕方 食事を 作ら なければならぬ(必要)
margāš norəb ir-əx jostoi.

明日 ノロブが 来る はずだ(当然)
bi nom unš-əx durtai.

私は 本を 読む のが好きだ(嗜好)

4) 副動詞類は, 副詞と同様に, 他の動詞, 形容詞, 副詞などを修飾する形である。同時に, 動詞として他の語句を支配するはたらきを有し, 副詞句および副詞節の核となる。あるものは, 等位節の述語となって, 文を中止し, 他のものは, 従属節の述語となって, 主文に連なる(表13)。

〈表 13〉 副動詞類の語尾

種類	語尾	例
連合	-(ə)ŋ	ir-əŋ 「来, …」
並列	-(ə)dž, -tš	ir-dž 「来て, …」
分離	-(G)ād'	ir-əd 「来てから, …」
条件	-bəl	ir-bəl 「来れば, …」
継続	-sār'	ir-sēr 「来続けて, …」
限界	-təl	ir-təl 「来るまで, …」
即刻	-məgts	ir-məgts 「来るとすぐ, …」
随伴	-(ə)xlār'	ir-əxlēr 「来るとともに, …」
付帯	-(ə)ŋgüt'	ir-əŋgüt
	~-(ə)ŋgā'	~ir-əŋgē 「来るついでに…」

並列の副動詞語尾のうち, -tš は, ab- 「取る」, ög- 「与える」, xür- 「違する」, gar- 「出る」, sur- 「学ぶ」, bos- 「起きる」など, b, g, r, s で終わる少数の語幹に, -(ə)dž は, それ以外の語幹に付き, カッコ内の弱化母音は, 子音 d, t, dž, dz, s, š, tš, ts, x で終わる語幹に付く場合に現われる。

その他の語尾のカッコ内の弱化母音ə は, 子音で終わる語幹に付く際に現われる。

このほか, 副動詞的な機能をもつものとして, 次のような形も用いられる。これらは, 2つの接尾辞が融合した形である。

目的 -xār' : ir-xēr 「～来るために…」

時 -xəd : ir-xəd 「～来るとき, ～来たとき」

否定 -(ə)lgüi : ir-əlgüi 「～来ずに…」

並列の副動詞は, 動詞 bai- 「～がある(いる)」, bol- 「～になる」, tšad- 「できる」, üdz- 「見る」などと結びついて, 動作のさまざまなアスペクトや様態を表わす。

id-ədž bai-n. 「食べている(進行)」

id-ədž bol-ən. 「食べてよい(許可)」

id-ədž tšad-ən. 「食べることができる(可能)」

id-ədž üdz-ən. 「食べてみる(試行)」

動詞の態(voice)には, 1) 使役態, 2) 受動態, 3) 共同態, 4) 相互態, 5) 衆動態の5種類があり,

動詞語幹に、それぞれ、次の接尾辞を付けて表わす。

- 1) 使役態: -ül², -lөг (~lөг) (後者は、長母音、二重母音に終わる語に付く)「～させる」
unt-「眠る」—untül-「眠らせる」
ū-「飲む」—ūlөг-「飲ませる」
- 2) 受動態: -(ə)gd「～される」
al-「殺す」—alөгd-「殺される」
üdz-「見る」—üdzөгd-「見られる、見える」
- 3) 共同態: -(ə)lts「(誰かと) いっしょに～する」
ir-「来る」—irөлts-「いっしょに来る」
or-「入る」—orөлts-「いっしょに入る、参加する」
- 4) 相互態: -(ə)ld「互いに～し合う」
tsóx-「打つ」—tsóxөld-「打ち合う」
inē-「笑う」—inөld-「笑い合う」
- 5) 衆動態: -tsгā⁴「大勢で～する」
jab-「行く」—jabtsгā-「大勢で行く」
inē-「笑う」—inөtsгē-「大勢で笑う」

動詞の体 (aspect) の主なものは、次のとおりである。

- 1) 完了体: -tš(өx)「～してしまう」
jab-「行く」—jabts(өx)-「行ってしまう」
or-「入る」—ortš(өx)-「入ってしまう」
- 2) 瞬時体: -(ə)sxī, -dzөн「ちょっと～する」
jab-「行く」—jabөsxī-, jabdzөн-「ちょっと行く」
üdz-「見る」—üdzөsxī-, üdzdzөн-「ちょっと見る」

E) 後置詞 後置詞は、名詞類の後におかれて、他の語との関係を表わす。主な後置詞には、次のようなものがある。

- 1) 語幹形(「不定のn」をもたない形)を支配するもの: öd「～の方へ」, rü²「～の方へ」, Garui「～以上」, šaxū, šaxөm「～近く、ほぼ～」, dāxөг「～倍」, xürtөл「～まで」, šig, met「～のように」, など。

ter ül öd xar.

あの山の方を見なさい

bat surgül rü jab-lä.

バトは学校の方へ行った

en bat-ij emөл šig bai-n.

これはバトの鞍のようだ

- 2) 語幹形(「不定のn」をもつ形)を支配するもの: dөр「～の上に」, dor, dөр「～の下に」, dotөр「～の中に」, turš, turšөd「～の間に」, など。

širөг dөр xedөг nom bai-n.

机の上に何冊かの本がある

oггөts dotөр töxlөг bai-dөг.

飛行機の中は快適だ

gurbөг ödөр, Gurbөг šөн turš borө or-өb.

3 日 3 晩の間雨が降った

- 3) 属格形を支配するもの: tölө「～のために」, tul, tuld「～のために」, orөnd「～の代わりに」, tšinө「～の程度(量)の」, tuxai「～について」, dund「～のまん中に」, xөрөnd「～の間に」, ömөн「～の前に」, xoin「～の後ろに」, xadzüd「～の側に」, dacū「～に沿って」, など。

arөd түмөң ex orn-ī tölө temts-өb.

民衆は 母国のために戦った

bid šin nom-ij tuxai

私たちは新しい本について

järөлts-өdž sū-n.

話し合っています

- 4) 奪格を支配するもの: үрд, ömөн「～の前に」, xoiš「～の後で」, Gadөн「～のほかに」, など。

adžөл tar-sn-äs xoiš xojülä üldz-өj.

仕事が終わった後で2人で会いましょう

- 5) 共同格を支配するもの: xamt, tsug「～といっしょに」, など。

助詞の, tš, tšig「～も」と, l「～こそ; ～だけ」は、後置詞と同じように、語句の直後におかれて、先行する語句を強調するはたらきをする。

nad xarөндä tš bi, üdzөг tš bi.

私には鉛筆もある、ペンもある

өnd jü tš ügüi.

ここには何もない

ün-ig xөг tš med-өн.

これは誰でも知っている

tā l adžөл-d-ä ir-lө.

あなただけが仕事に(自分の)来た

bi neg l tšixөр ab-sөг.

私は1個だけキャンデーを取った

[統 辞] モンゴル語の語順は、従属的な修飾語句が、それを受ける被修飾語句の前におかれるのが原則である。冠詞、関係詞はなく、前置詞の代わりに、後置詞を用いる。名詞や形容詞に、文法的な性の範疇はなく、形容詞は、語幹形のままで名詞類を修飾し、また、補語ともなる。形容詞や副詞に、比較級や最上級の語形変化はなく、比較される対象は、奪格(「～より」)におかれる。

文は、述語動詞を中心に構成され、主語や目的語をはじめとする他の文成分は、述語動詞にかかる2次的な修飾的成分と見なすことができる。

述語動詞は、原則として文末に位置するが、述語動詞以外の文成分の相互の順序は、比較的自由である。

語順としては、主語-目的語-述語動詞(SOV)の順が、もっとも一般的で安定している。全体として、モンゴル語の語順は、日本語の語順にきわめて近い。

ötšөгдөр bid sönөҗ үлгөр sons-өб.
 昨日 私たちは 面白い 昔話を 聞いた
 bagš bidən-d saixөҗ dzurөг үдзүл-өб.
 先生は 私たちに きれいな 絵を 見せてくれた
 bairən-d sū-dөг ојүтн-үд өглө долөҗ
 寮に 住んでいる 学生たちは 朝 7
 tsag-t bos-öd bij-iy tāmөр xī-dөг.
 時に 起きて 体 操を する
 tengгөр dulāҗ bol-dž, nar gar-bөл bid
 天気が 暖かくなって、日が 出れば 私たちは
 talbai-d otš-өдž möсөҗ дөр gul-өдž
 広場に 行って 氷の 上で 滑って
 togl-өн.
 遊びます

述語動詞は、補語を必要とするものと、補語を必要としないものに大別される。補語を必要とする動詞の代表的なものは、繫辞動詞としての bai-「～である」、および、bol-「～になる」である。

tan-i malgai džidžөг бай-н.
 あなたの 帽子は 小さい です
 bajar öngөрсөҗ джил адžөлтсөҗ бай-сөҗ.
 バヤルは 去 年 労働者 だった
 bid bagš бол-өн.
 私たちは 教師に なります

繫辞動詞の現在時制形(bai-н)は、省略されることがあり、その場合、述語は、名詞、形容詞などの補語だけで構成される。

bī ојүтөҗ.
 私は 学生です
 en min-i үдзөг.
 これは 私の ペンです
 atš-өн ün-ās öндөр, dalai-gās гүй.
 恩は(←その) 山より 高く、 海より 深い
 繫辞の打ち消しは、biš「～でない」によって表わす。

bī ојүтөҗ биš.
 私は 学生 ではない
 en min-i үдзөг биš.
 これは 私の ペン ではない

存在の表現は、動詞 bai-「～がある(いる)」や bi「～がある(いる)」によって表わし、その否定には、ügüi, alөг, baixgüi「～がない」などが用いられる。

ert үрд tsag-t emгөҗ
 ずっと 以前 の時に(昔々) お婆さんと
 öbgөҗ xojer бай-дžө.
 お爺さん(2人)が いた
 ter үл-iy tsān xedөҗ ail бi.
 あの 山の 向こうに いくつかの 村が ある

end šin nom бай-н ү?
 ここに 新しい 本が ありますか?
 — alөг(～baixgüi).
 ありません

tanaid xönn-i max бай-н ү?—бай-н.
 おたくに 羊の 肉は ありますか? あります
 次のような語は、述語の後の文末におかれ、文全体を修飾する。多くは強勢をもたず、先行する語に付着して、その一部のように発音される。これらは、文の内容について、話者が推定したり、聞き手に確認したりするものである。

1) 疑問: (ə)b ~ bē; (j)ü²「～か」 (ə)b ~ bē は、疑問詞を含む疑問文に、(j)ü² は、疑問詞を含まない Yes-No 疑問文に用いられる。子音 j は、長母音、二重母音で終わる語の後に現われる。

en jū b?
 これは 何ですか?
 ter xüy xөҗ бө?
 あの 人は 誰ですか?
 dordž ger-t-ē бай-гә jū, baixgüi jū?
 ドルジは 家に(自分の) いますか、 いません か?

2) 確認: jim「～のだ」、mön「～にちがいない」、ā「～よ、～ね」、šü²「～よ」、dā「～ね」、bilē「～なのだった(再確認)」, など。

ter xüy bagš jim.
 あの 人は 先生 なのです
 en min-i nom möн.
 これは 私の 本 に違いない
 сайҗ бай-н ү?—сайҗ бай-н ā.
 お元気 ですか? 元気 ですよ
 бi ün-ig tan-d xel-сөҗ sū.
 私は このことを あなたに 言いましたよ

man-ai nutөг-t borō ix or-сөҗ dō.
 私たちの 故郷で 雨が たくさん 降ったんですね
 tan-i obөг xөҗ ge-dөг билө?
 あなたの 姓は 誰(何) というんでしたっけ?

3) 推量: bol「～だろうか(自問)」, baix「～だろう」, bidz「～だろう(ね)」, など。

marGāš tengгөр jāmөр бол-өх бол?
 明日は 天気は どんなになる だろうか?
 marGāš сайҗ өдөр бол-өх baix.
 明日は いい日になる でしょう
 dordž ir-сөҗ-güi, öbd-сөҗ bidz.
 ドルジは 来なかった、 病気になったん だろう

関係詞はなく、従属節は、形動詞や副動詞によってまとめられる。形動詞や副動詞は、そのままの形で、主文中の語句を修飾し、あるいは、格語尾、後置詞、接続詞を従えて、主文中の語句を修飾する。

xödön-ös ir-seŋ xüŋ udəxgüi jab-ən.
 田舎から 来た 人は 間もなく 出発します
 bi dzuŋ amrəlt-ā ab-tš,
 私は 夏に 休暇を(自分の) とり、
 nutəg-t-ā jab-dž amər-dəg.
 故郷に(自分の) 行って 休みます
 dzotšəd xöl id-sn-i darā xjanū
 来客たちは 食事を 食べた 後で 映画を
 üdz-əb.

見ました
 en tobtš-ig dar-bəl xoŋx dūgər-dəg.
 この ボタンを 押せば ベルが 鳴ります
 bat ötsəgdər öbtštöi bai-seŋ utšər
 バトは 昨日 病気 だったので
 xitšəl-d-ē ir-seŋ-güi.

授業に(自分の) 来なかった

主文の主語と従属文の主語が異なる場合、従属文の主語は、属格形や対格形(もしくは不定格形)におかれる。形容詞節の主語は属格形に、副詞節の主語は対格形(または不定格形)になることが多い。

tan-i nad-əd ög-seŋ nom-ig bi
 あなたが(属格) 私に くれた 本を 私は
 ix sönərx-ədž unš-lā.

大変 面白く 読みました

tan-ig margāš mašn-ār jab-bəl,
 あなたが(対格) 明日 自動車で 行くなり、
 bid xamt jab-ən.

私たちは いっしょに 行きます

tšamai-g mör-ō bār-təl bi
 君が(対格) 自分の馬を 捕らえるまで 私は
 end xülē-dž bai-j.

ここで 待って きましょう

margāš teŋgər saixəŋ bai-bəl

明日 天気(不定格) よければ

bid xödö jab-ən.

私たちは 田舎に 行きます

[語彙] モンゴル語の基礎的な語彙(数詞、代名詞、後置詞、身体名称、親族語彙、日常の使用頻度の高い基本的な動詞や形容詞など)の大部分は、モンゴル語に固有の語彙からなっている。これと並んで、特に、今世紀におけるロシア、ソ連邦との緊密な関係を反映して、現代の政治、経済、文化、学術などの諸分野で、ロシア語からの借用語、および、翻訳借用(calque)が多く用いられているのが、現代モンゴル語の語彙の一特徴である。

ロシア語からの借用語の例をあげる。

pjödöl「封建領主」(<феодал), komnīdzəm「共產主義」(<коммунизм), āgəṁ「軍隊」(<армия),

komis「委員会」(<комиссия), diptāt「代議員」(<депутат), fābrik「製作所」(<фабрика), džidžūr「当直」(<дежурный), харəŋdā「鉛筆」(<карандаш), xjanū「映画」(<кино), arādžiu「ラジオ、無線機」(<радио), tšātər「劇場」(<театр), mašīŋ「自動車」(<машина), ātəm「原子」(<атом), など。

借用語としては、このほか、過去における周辺諸民族との文化的な接触を反映して、チュルク語、チベット語、中国語からの借用語が見いだされる。

チュルク語からの借用語は、時代的にもっとも古い層に属し、モンゴル語に深く浸透している。モンゴル語とチュルク語との間には、意味と音形の類似する単語が数多く見いだされるが、それらの中には、借用によるものか、あるいは、系統的に共通の祖形を受け継ぐものか、研究者の間で意見の分かれるものも少なくない。

チュルク語からの借用語の例には、次のようなものがある。

teŋgər「天」(<täŋri), ajəg「椀」(<ажақ), burxəŋ「神、仏」(<burxan), taməg「印刷」(<tamɣa), arbai「大麦」(<арпа), arəl「鳥」(<арал), dzul「灯明」(<jula), xörəg「像」(<körk), büləg「部、章」(<bölük), biləg「知恵」(<bilig), nom「経典」(<nom), xiləntš「罪業」(<qilinč), tus「利益」(<tusu), tam「地獄」(<tamu), arsləŋ「獅子」(<арслан), など。

これらの中には、主に、元朝の時代に、ウイグル語の仏典を翻訳する際にとり入れられた、仏教関係の語彙が少なくない。次のような、サンスクリット語(Skt.)やペルシア語(Pers.)に由来する語も、ウイグル語を介して、とり入れられたものである。

bujəŋ「徳」(<bujan < Skt. puṇya), erdən「宝」(<erdäni < Skt. ratna), sudər「教法」(< sutur < Skt. sūtra), dzaŋdəŋ「梅檀」(< čindan < Skt. candana), galəb「劫」(< kalp < Skt. kalpa), šid「魔法」(< sidi < Skt. siddhi), ters「異端の」(< ters < Pers. tarsā), bar「虎」(< bars < Pers. pārs), tšixər「砂糖」(< šākār < Pers. šakar), など。

チベット語からの借用語は、明朝および清朝の時代に、チベット仏教(ラマ教)がモンゴルに弘通するとともに、とり入れられた語彙が多い。モンゴル人の人名に、チベット語に由来する名前が多いことも、チベット仏教との深い関係を反映している。

buṅxəŋ「廟」(< spungs-khang), lam「ラマ僧」(< bla-ma), namtər「伝記」(< rnam-thar),

bot「巻」(< po-ti), gartšəg「目次」(< kar-chag), bag「仮面」(< 'bag), nóməg「瑠璃」(< mu-men), šil「ガラス」(< shel), duḡ「貝殻」(< dung), xorbō「世界」(< 'khor-ba), njam「日曜日」(< nyi-ma), bjamb「土曜日」(< spen-pa), bum「10万」(< 'bum), saḡ「100万」(< sa-ja), など。

中国語からの借用語では、明朝や清朝の時代における、中国との交易を通してとり入れられた、生活用品や食品に関する語彙が目立つ。

tsoḡx「窓」(< 窗戶 chuānghu), pūs「商店」(< 鋪子 pūz), gaḡ「鋼」(< gāng), šādzəḡ「陶磁器」(< 茶具 cházhōng), bū「銃」(< 砲 pào), daḡx「やかん」(< 銅壺 tónghú), Gaḡs「キセル」(< 管子 guǎnz), dābū「布」(< 大布 dàbù), šūdai「袋」(< 小袋 xiǎodài), tsāləḡ「賃金, 給料」(< 錢糧 qiánliang), būdz「包子」(< bāoz), bōb「練り粉菓子」(< 饅頭 bōbo), bātsai「白菜」(< báicài), mōḡ「きのこ」(< 蘑菇 mógu), など。

【方言】 モンゴル人民共和国では、国の大部分の地域に、ハルハ方言が行なわれている。ハルハ方言は、分布地域の広さでも、話者数の多さでも、モンゴルでもっとも有力な方言であり、その担い手であるハルハ族は、1979年の統計によれば、1,235,800人を数え、国の人口の77.5パーセントを占めている。すでに述べたように、モンゴル語の書きことばと標準発音は、ハルハ方言に基づき、それを規範化したものである。

ハルハ方言のほかに、モンゴル国内で話されている口語方言の主要なものとしては、国の西部で行なわれているオイラト(Ойрд)方言、北部のソ連邦国境沿いに分布するブリヤート(Буриад)方言、および、東部のウズムチン(Үзэмчин)方言をあげることができる。さらに、西部の国境に隣接したバヤンウルギー(Баян-өлгий)アイマク(アイマクは、州、県にあたる行政単位)では、住民のほとんどが、チュルク系のカザフ族であり、そこでは、公用語としてカザフ語が行なわれている(ちなみに、モンゴル人民共和国のカザフ族の人口は、1979年の統計によれば、84,300人で、全人口の5.3パーセントにあたる)。

これにより、モンゴル国内の口語方言を、1)ハルハ方言、2)オイラト方言、3)ブリヤート方言、および、4)ウズムチン方言の4つに大別することができる。

言語的な特徴からすれば、オイラト方言とブリヤート方言は、それぞれ、オイラト語、ブリヤート語と共通の特徴を有し、ウズムチン方言は、中国内蒙古のチャハル方言に近い。言語的な特徴の詳細については、

それぞれ、「オイラト語」「ブリヤート語」および「内蒙古語」の項に譲るが、表14は、それらのもっとも顕著な音声的な特徴を対比させたものである。

〈表 14〉 モンゴル国内の口語4方言の音声比較

蒙古文語	j		č		s	k	ayi ~ai	ö
	i の前	その 他	i の前	その 他				
ハルハ	dž	dz	tš	ts	s	x	ai	ö
オイラト	dž	z	tš	ts	s	k	ē	ö
ブリヤート	ž		š		h	x	ai	ü
ウズムチン	dž		tš		s	x	ē	ö

以下に、具体例をあげる。

蒙古文語	ハルハ	オイラト	ブリヤート	ウズムチン
ḡida「槍」	džad	džide	žada	džäd
ḡalaḡu「若い」	dzalū	zalū	zalū	džalū
čimeḡ「飾り」	tšimeḡ	tšimeḡ	šimeḡ	tšimeḡ
čaḡ「時間」	tsag	tsag	sag	tšag
sayin「良い」	saiḡ	sēn	haiḡ	sēḡ
köl「足」	xöl	köl	xül	xöl

次に、ハルハ方言を中心に、口語方言の概況を述べる。

1)ハルハ方言は、a)東部ハルハ方言、b)中部ハルハ方言、および、c)西部ハルハ方言の3つの下位方言に分けられる。分布地域の広大さに比べて、下位方言相互の差異はわずかである。下位方言の分布地域は、古い行政区画の領域と重なるところが多い。

a)東部ハルハ方言は、旧ツェツェンハン(Цэцэнхан)部とダリガンガ(Дариганга)、現在のドルノド(Дорнод)、スフバートル(Сүхбаатар)両アイマク、および、ヘンティー(Хэнтий)アイマクの東部と南部に行なわれる。スフバートル・アイマクの南部に行なわれるダリガンガ方言は、これに含まれる。

東部ハルハ方言の主な特徴は、次のとおりである。

i)語頭の硬音 t, ts, tš, x が、d, dz, dž, g(g)として現われる異化現象が顕著である(元来、第2音節頭にも、硬音 t, ts, tš, x, s, š がある場合)。

蒙古文語 正書法表記 東部ハルハ方言

tosu(n)	тос	dos	「油」
čečeg	цэцэг	dzetseg	「花」
qota	хот	got	「町」

ダリガンガ方言では、さらに、語頭の s, š も異化して、それぞれ、dz, dž となる。

蒙古文語 正書法表記 ダリガンガ方言

süke	сүх	dziux	「斧」
saḡal	сахал	dzaxəl	「ひげ」
šatu(n)	шат	džat	「階段」

ii)文章語の yḡ, yḡ を、長母音の i で発音する。

蒙古文語	正書法表記	東部ハルハ方言
darui	даруй	darī 「ただちに」
küiten	хүйтэн	xītəŋ 「寒い」

iii) 名詞の複数形語尾として、-tšūd ~ -tšūd の代わりに、-tšül ~ -tšül を多く用いる。

dzalū 「若者」—dzalū-tšül 「若者たち」

er 「男」—er-tšül 「男たち」

b) 中部ハルハ方言は、主に、旧トシェートハン(Түшээт хан)部とサインノヤンハン(Сайн ноён хан)部、コソゴル(Косогол)、現在のセレンゲ(Сэлэнгэ)、トゥブ(Төв)、ドンドゴビ(Дундговь)、ドルノゴビ(Дорноговь)、ボルガン(Булган)、アルハンガイ(Архангай)、ウブルハンガイ(Өвөрхангай)、バヤンホンゴル(Баянхонгор)、ウムヌゴビ(Өмнөговь)の各アイマク、ザブハン(Завхан)アイマクの東部、および、フブスグル(Хөвсгөл)アイマクの東部と南部に分布する。

中部ハルハ方言を、さらに下位分類して、

i) 首都ウランバートル(Улаанбаатар)を中心とする方言

ii) ウブルハンガイ・アイマクの方言

iii) ゴビ(Говь)の方言

を区別することがある。ゴビの方言には、ハルハ化したハラチンの方言が含まれる。

現代文章語の正書法は、中部ハルハ方言に基づいており、標準発音も、この方言の特徴を反映している。

c) 西部ハルハ方言は、旧ザサグトハン(Засагт хан)部とコソゴル、現在のゴビアルタイ(Говь-Алтай)アイマク、ザブハン・アイマクの西部と北部、フブスグル・アイマクの西部と北部、および、ホブド(Ховд)アイマクの東部で話されている。

西部ハルハ方言には、次の部族方言が含まれる。

i) フブスグル・アイマクの北部、フブスグル湖の西で話されているダルハト(Дархад)方言

ii) フブスグル・アイマクの西部とザブハン・アイマクの北部で話されているホトゴイト(Хотгойд)方言(これに、ホブド・アイマクの北部で話されているミンガト(Мянгад)方言を加える分類もある)

iii) オブス(Увс)アイマクの東部で話されているイルジギン(Илжгэн)方言

iv) ザブハン・アイマクの西部、および、ザブハン、オブス、ホブドの3アイマクの隣接部で話されているサルトル(Саргуул)方言

v) アルハンガイ・アイマクのハルハ化したエルート(Өөлд)、および、ゴビアルタイ・アイマクのハルハ化したエルート、コイト(Хойд)の方言(エルート、コイトは、オイラト系の部族)

西部ハルハ方言の特徴は、オイラト語と共通の特徴が、少なからず認められることである。たとえば、次のような点があげられる。

ア) 母音 e, ü, ö を含む単語の語頭で、摩擦音の x の代わりに、閉鎖音の k が現われる。

蒙古文語	正書法表記	西部ハルハ方言
ködege(n)	хөдөө	ködö 「田舎」
kereg	хэрэг	kerəg 「用事」

イ) 第1音節の母音 *i が、第2音節の母音 *a の前で、i のまま保持されている。

蒙古文語	正書法表記	西部ハルハ方言
jirγal	жаргал	džirgəl 「喜び」
čidal	чадал	tšidəl 「能力」
mingγa(n)	мянга	miŋgə 「1,000」

ウ) モンゴル文語の -ngn- の連結に対して、-ŋn- が対応する(中部、東部では、-gn- が対応する)。

蒙古文語	正書法表記	西部ハルハ方言
mangnai	магнай	maŋnae ^{der} 「額」
tangnai	тагнай	taŋnae 「口蓋」
šangnal	шагнал	šaŋnəl 「報償」

2) オイラト方言は、西部のホブド、オブス両アイマクで話される。モンゴルにおけるオイラト方言の話者は、総計10数万人と推定される。

オイラト方言は、北のオブス・アイマクに居住するドルベト(Дөрвөд)、エルート、バヤト(Баяд)などの方言を含む北部オイラト方言と、南のホブド・アイマクに分布するザハチン(Захчин)、ウリヤンハイ(Урианхай)、トルグート(Торгууд)などの方言を含む南部オイラト方言の2つの下位方言に分けられる。

3) モンゴル国内のブリヤート方言は、ソ連邦のブリヤート自治共和国(Бурятская АССР)およびチタ州(Читинская область)との国境沿いに居住する、ブリヤート族によって話されている。モンゴル国内のブリヤート族の人口は、1979年の統計で29,800人を数え、全人口の1.9パーセントにあたる。ブリヤート方言は、次の2つの下位方言に分けられる。

a) セレンゲ、ヘンティー、ドルノドの3アイマク北部の、オノン(Онон)、ウルズ(Улз)両川流域に分布するオノン・ウルズ方言。この方言の話し手は、ホリ(Хори)、アガ(Ага)、ハムニガン(Хамниган)、クダラ(Худир)、バルガ(Барга)などの部族であり、ブリヤート語の特徴が、ほとんどそのまま保持されている。

b) ボルガン、フブスグル両アイマク北部のセレンゲ、ウール(Үүр)両川流域に分布する、セレンゲ・ウール方言。ブリヤート語よりも、むしろ、ハルハ方言と共通の特徴が多い。この方言は、トゥンキン(Түнхин)、サナガ(Санага)、ツォンゴール(Цонгоол)などの部族

によって話されている。

4) ウズムチン方言は、東部のスフバートル・アイマクの東端の地域で話されている。基本的な言語的特徴は、内モンゴルのチャハル方言とほとんど同じである。話者数は、不詳である。

【辞書】

Цэвэл, Я. (1966), *Монгол хэлний товч тайлбар толь* (Шинжлэх Ухааны Академийн Хэл зохиолын хүрээлэн, Улаанбаатар)——現代のモンゴル語—モンゴル語辞典として、唯一のものである。見出し語数は、約3万。

D. トモルトゴ著、小沢重男、蓮見治雄編訳(1979), 『現代蒙英日辞典』(開明書院, 東京)——小型ながら、複合語、熟語が豊富である。

小沢重男編著(1983), 『現代モンゴル語辞典』(大学書林, 東京)——モンゴル語—日本語辞典として、最大、最良のもの。

なお、次の辞書は、モンゴル文語の辞典であるが、ロシア文字表記の索引が付いている。

Lessing, F.D. (ed.) (1982), *Mongolian-English Dictionary* (Corrected reprinting, The Mongolia Society, Bloomington; 初版1960)

そのほかのモンゴル語—外国語辞典としては、次のようなものがある。

Лувсандэндэв, А. (1957), *Монгольско-русский словарь* (Государственное издательство иностранных и национальных словарей, Москва)

Hangin, G. (1986), *A Modern Mongolian-English Dictionary* (The Mongolia Society, Bloomington)

Цэдэндамба, Ц. (1986), *Монгол-орос-англи толь* (Ардын Боловсролын Яамны Сурах бичиг, сэтгүүлийн нэгдсэн редакцын газар, Улаанбаатар)——モンゴル語—ロシア語—英語辞典。

Vietze, H. (1988), *Wörterbuch Mongolisch-Deutsch* (VEB Verlag Enzyklopädie, Leipzig)
次に、外国語—モンゴル語辞典の主なものをあげる。

Hangin, G. (1970), *A Concise English-Mongolian Dictionary* (Indiana University, Bloomington)

Vietze, H. (1981), *Wörterbuch Deutsch-Mongolisch* (VEB Verlag Enzyklopädie, Leipzig)

Дамдинсүрэн, Ц., А. Лувсандэндэв (1982), *Орос-монгол толь* (Улсын хэвлэлийн газар, Улаанбаатар)——ロシア語—モンゴル語辞典。

4000 наиболее употребительных слов русского языка: *Русско-монгольский учебный словарь* (Русский язык, Москва, 1985)——ロシア語—モンゴル語常用語学習辞典。図, 写真多数。

【参考文献】

1) 言語概説, 文法書

Бертагаев, Т.А. (1964), *Синтаксис современного монгольского языка в сравнительном освещении. Простое предложение* (Наука, Москва)

Лувсанвандан, Ш. (1967), *Орчин цагийн монгол хэлний зүй. Тэргүүн дэвтэр. Монгол хэлний авианы бүтэц* (Шинжлэх Ухааны Академи, Улаанбаатар)

—— (1968), *Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц. Монгол хэлний уг, нөхцөл хоёр нь* (Шинжлэх Ухааны Академи, Улаанбаатар)

Орчин цагийн монгол хэл зүй (Улсын хэвлэлийн хэрэг эрхлэх хороо, Улаанбаатар, 1966)——モンゴルの研究者の共著による文法書。

Poppe, N. (1951), *Khalkha-mongolische Grammatik mit Bibliographie, Sprachproben und Glossar* (Franz Steiner, Wiesbaden)——ハルハ方言のもっとも詳しい文法書。

—— (1970), *Mongolian Language Handbook* (The Center for Applied Linguistics, Washington, D.C.)

Ramstedt, G.J. (1902), "Das schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen", *Journal de la Société Finno-ougrienne* XXI(2) (Helsingfors)——ハルハ方言の音声的な記述と、モンゴル文語との比較による、音韻の史的変化の考察。

—— (1903), *Über die konjugation des khalkha-mongolischen* (Mémoires de la Société Finno-ougrienne XIX, Helsingfors)——ハルハ方言の動詞活用体系の記述。

Sanzheyev, G.D. (1973), *The Modern Mongolian Language* (Nauka, Moscow)

Street, J.C. (1963), *Khalkha Structure* (Uralic and Altaic series, Vol. 24, Indiana University, Bloomington)

Тодаева, Б.Х. (1951), *Грамматика современного монгольского языка. Фонетика и морфология* (Наука, Москва)

Владимирцов, Б. Я. (1929), *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия. Введение и фонетика* (Ленинградский Восточный Институт имени А.С. Енукидзе, Ленинград)——モンゴル語歴史文法の概説・音声編。ハルハ方言の詳細な音声的記述を含む。

日本語で書かれた入門文法書としては、次の2書が

あり、後者は、入門用に読みやすくまとまっている。
小沢重男(1963), 『モンゴール語四週間』(大学書林,
東京)

———— (1968), 『モンゴル語の話』(大学書林, 東京)

2) 方言

*Монгол Ард Улсын угсаатны судлал, хэлний
шинжлэлийн атлас* (Улаанбаатар, 1979)——
民族学・言語地図集.

Лувсанвандан, Ш. (1959), *Монгол хэл аялгууны
учир* (Studia Mongolica, Tomus 1, Fasciculus
32, Улаанбаатар)

Цолоо, Ж. (1967), “Халхын зарим аман аялгууны
авиа зүйн онцлогоос”, *Шинжлэх Ухааны
Академийн мэдээ*, No. 1 (Улаанбаатар)

———— (1985), “К вопросу классификации
диалектов в МНР”, *Монгольский лингвистический сборник* (Наука, Москва)

———— (1987), “БНМАУ-ын нутгийн аялгуу”,
Хэл зохиол судлал XVIII (1) (Шинжлэх
Ухааны Академи, Улаанбаатар)——モンゴル人
人民共和国の口語方言の分類概説.

Вандуй, Э., Ж. Цолоо (1970), *Халхын аялгуу*
(Шинжлэх Ухааны Академийн Хэл зохиолын
хүрээлэн, Улаанбаатар)——ハルハ方言の音声的
記述と下位方言の分類.

[参 照] オイラト語, 内蒙古語, プリヤート語,
モンゴル諸語

(栗林 均)